

中国転換期の前衛アーティストたち③

文・石川 郁(作家・北京在住)

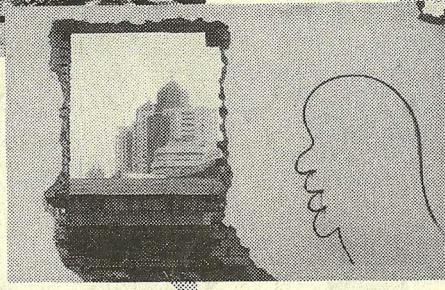
Text by Ishikawa Iku



Zhang
Dali

張
大
力

写真上:98年2月21日に大力が行った対話統編パフォーマンス<拆>。廃墟の壁に描いた頭像を鑿やかんなどうがち、くり抜いた。写真右:対話統編パフォーマンス<拆>廃墟にくり抜かれた頭像を透かして見える、対照的な現代高層ビル。



この「頭像」の仕掛け人こそ張大力。彼が数年来力を入れているコンセプトアート作品「对话」である。

「これは僕と都市との对话、人との对话。ここに新しい絆や

字を書き加えてもいい。しせせと消してくれてもいい。いすれにせよこの頭像が人々を刺

激し、いろんな印象や感覚を生

む。北京は日に日に現代化され

ていくが、この都市の文化構造

は急速な経済発展に追いついていない。前衛美術に至って

は、まともに扱う美術館や画廊

もないし、これじゃ成熟した都

市とは言えないさ。『对话』は

Chinese Artist

激変する都市との 〈对话〉に挑戦

そんな人と都市との関係を表してもいる。張大力は黒竜江省ハルビン生まれの三五歳。もともと水墨画を描いていたが、八九年にイタリアへ渡ったのがきっかけで伝統絵画の世界に別れを告げ、自己存在、個人と社会との関わりや交流を重視するコンセプトアートへの道を進み始める。

北京でこの『对话』を始めたのは九五年の夏で、今までに描いた数はなんと三千を超えると

いう。こうしたグラフィティアートは、ニューヨークやヨーロッパではもうお馴染みだが、北京では初お目見え。巷ではちゃんとグレーブのマークだと、取り壊し家屋の表示とか、いろんな風説が飛び交つた。公共の場所へのペインントだから、見つかれば当然取締られる。街の美観を損ねる不埒な行為、不道德だとの批判も多いが、彼いわく、「僕が描くのはみんな廢墟や目立たない場所で、市民生活に悪影響は及ぼしていないよ。街に融和化し、都市の変貌と共にいずれは消えていく、いわば都市の痕跡なんだ」。

最近、彼の『对话』は、(作

者の名前は伏せたままだが)新聞や雑誌で盛んに取り上げら

れ、アートか否か?と侃侃谔の論議を呼んでいる。「やり始めで三年、やっと新聞やメディアが芸術の角度からこの作品を論じるようになった。大きな進歩だよ。中国のメディアは政府の意向を直接反映しているからね。賛成にしろ反対にしろ公開の場で自由に討論できることが重要なんだ。そのうち名前も公開でき、美術館や画廊で発表できるようになると信じてる」。

大力は、この観念のシンボルをモチーフにしたインスタレーションや電飾広告、陶器作品なども創作している。二月には、廃墟の壁に描いた頭像をくり抜くというパフォーマンスも試みた。数人の出稼ぎ労働者と一緒に、鑿やかんなで壁をうがつこと一時間。頭型にぶち抜かれた穴の向こうに豪華な高層ビルがのぞく。そこには、まさに移ろいゆく北京の『今』があつた。